

# 父親における子育てと遊びに関する一研究

— インタビュー調査をもとに —

石川 洋子

## I. はじめに

出生率の低下と共に、子育てに対する社会的関心が高まっているが、その中でも父親の存在について焦点が向けられるようになってきている。

父親の役割については、従来より多くの理論が提出されている。Freud, S.に代表される精神分析理論, Parsons, T.の父親の道具的機能(家族を社会に関係づける)と母親の表出的機能(家族内の情緒的な支持や調整を行う)の理論, 父親をモデルとして性役割の発達に寄与するとする学習理論などであろう。父親が母子分離を促進する役割があることなども指摘されている。

父親論を考える場合には、この他に歴史的背景なども考慮されなければならないであろうが、現代の実際の生活の中での父親の姿を離れて論じることができないであろう。

筆者は1992年に父親の調査において、子どもとふれあおうとしている父親たちの姿を報告したが、家庭重視や生活重視の方針がうたわれてはいるものの、実際にはその方向への転換はなかなかむずかしいものようである。本研究は、このような中で父親たちがどのように子どもたちと接しているのか、どの位子育てをしているのか、それは父親の要因によりどう異なるのか、また今後どのような方向に進もうとしているのかをより明らかにすることを目的としている。

調査対象は、首都圏に住む乳幼児をもつ父親30名。父親たちの考えや行動をより詳細にとらえるために、インタビュー調査の方法を

とった。

調査日時は、1992年10月～1993年9月である。

## II. 結果と考察

調査対象の父親、母親の年齢、職業、子どもの人数などは、表1～表4の通りである。祖父母などが一緒である三世代家族は、4世帯であった。

表1 父親・母親の年齢

父親				%
29歳以下	30～34歳	35～39歳	40歳以上	
16.7	36.7	36.7	10.0	

母親

母親				%
29歳以下	30～34歳	35～39歳	40歳以上	
26.7	30.0	43.3	0	

表2 父親・母親の職業

父親				%
会社員	自営業	自由業	その他	
76.7	13.3	3.3	6.7	

母親

母親				%
専業主婦	フルタイム	パートタイム	その他	
80.0	6.7	13.3	0	

表3 子どもの人数 %

1人	2人	平均人数	1.53人
46.7	53.3		

表4 末子の年齢 %

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳
16.7	16.7	20.0	6.7	0	16.7	3.3	3.3	6.7

## 1. 父親の勤務形態・通勤時間と家庭で過ごす時間について

父親たちの職業は、自営業や自由業などが含まれているものの、通勤場所が自宅外が多く、昼間は父親の姿は子どもの目には直接ふれることのない者が93.3%にのぼった。職住接近で、仕事をしている父親の姿を子どもが見ることのできる者は、わずかに2名であった。

通勤時間は表5のように0分から2時間にわたっている。帰宅時間も、表6のように夕方4時から深夜12時までと、個人差が大きくなっている。自営業の父親のように9時に一旦帰宅し、食事の後また出かけたり、一昼夜勤務や、自由業で帰宅時間も不規則な者までさまざまであった。

表7は、父親の帰宅時間別に、家庭で過ごす時間の意識について尋ねた結果である。帰宅時間が早ければ当然家庭で過ごす時間も多くなり、帰宅時間が遅ければ家庭での時間も少なくなる。しかし、特に帰宅時間の遅い父親たちの意識に差があり、自分が必ずしも家庭で過ごす時間が不十分だとはみなしていないようであった。

表5 父親の通勤時間 %

0分	30分以内	30分～	1時間～	1時間30分～	2時間～
6.7	23.3	26.7	30.0	10.0	3.3

表6 父親の帰宅時間 %

～5時	5時～	6時～	7時～	8時～	9時～	10時～	11時～
3.3	3.3	20.0	23.3	13.3	10.0	6.6	20.0

(週の中多い方を記入)

表7 帰宅時間×家庭で過ごす時間について N

		十分ある	まあ十分	どちらともいえない	すこし不十分	かなり不十分
帰宅時間	～7時	6	1		1	
	7時～	2	6	1	2	1
	9時～	1	2	2	2	1
	不規則		1			1

## 2. 父親の子育て参加

父親の子育て参加の程度について、表8のように5段階のスケールで尋ねたところ、参加しているとする者が60%、あまり参加していないとするものが36.7%であった。しかし、インタビューの中で子育て参加の内容を尋ねていくと、実際に子育てを多くしている父親でも「まだ少ない」と答える者もあれば、あまりしていなくとも「まあ参加している方だろう」と答える者もあった。子育て参加の意識と、実際面においては若干のズレがあるようであった。

そこで、父親自身の回答と実際の子育てについての内容なども含めて、各父親の子育て参加の程度を判断してみた。図1はこの結果と通勤時間、帰宅時間とのクロス表である。

表中の◎は子育てに「大いに参加している父親(子どもの世話をよくしている父親)」、△は「少し参加している父親(夜一緒に入浴する程度)」、×は「全く参加していない父親」である。

一般的には、通勤時間も短く帰宅時間も早い父親が、子育てにも多くかかわっているのがわかる。そして帰宅時間の遅い父親は、子育てにはほとんどかかわっていない結果であった。しかし、その他にもさまざまな要件が見いだされる。

帰宅時間が遅かったり、勤務時間が不規則な父親の中にも、朝の出勤時間が遅いため午前中に子どもの世話をする者や、不規則な勤務時間の合間をぬって子どもとかわろうとする者も見られる。

また母親がフルタイムの共働きの父親は子育てに参加していたが、母親がパートタイムの就労をしている場合には、父親の子育て参加において、専業主婦との間にあまり差異は見いだせなかった。

祖父母と同居の場合には、父親の帰宅が早くとも子育て参加はあまりなされていない。

家庭の中での役割分担がなされているようである。

父親の年齢と子育てについての関連も見てみたが(表9)、年齢の若い父親にやや子育てをするものが多い傾向が見られたものの、大きな要因とはなっていないようであった。筆者は1992年に、若い父親ほど子育て参加への意識が高いことを報告したが、実際の子育て参加には、年齢以上に職業や帰宅時間といったものが大きくかかわっているものようである。

インタビューをした父親の中には、子ども

とのかかわりにあまり関心のないような者も見られた。しかし全体的には、できるだけ子どもとの関わりをもとうとする意識を持つ父親が多いように思われた。

父親論という一般論を論じるには、現代の父親たちは、帰宅時間や通勤時間、家庭内の状況などの個人的要因がさまざまに異なっている。ここにも現代の父親論を論じる難しさがあると思われるが、子どもと関わりを持つようとしている父親たちの大きなハードルの一つが、帰宅時間の遅さであることは指摘できよう。

表8 父親の子育て参加

%

とても参加	まあ参加	どちらとも いえない	あまり 参加せず	まったく 参加せず
6.7	53.3	3.3	36.7	0

図1 父親の子育て参加と通勤時間・帰宅時間

		帰 宅 時 間		
		～7時	7時～	9時～(不規則)
通 勤 時 間	～30分	◎ <sup>1)</sup> ◎ △ <sup>2)</sup> △ <sup>3)</sup>	◎ △△	△ <sup>2)</sup> × <sup>3)</sup>
	30分～	◎ △	◎ △ <sup>2)</sup> △△△	× <sup>2)</sup>
	1時間～	△ <sup>1)4)</sup> × <sup>3)</sup>	△ <sup>3)</sup> △△	◎ <sup>4)</sup> △ <sup>4)</sup> △ ×××××

- ◎—子育てに大いに参加している父親 1), 共働き (母親はフルタイム)  
 △—子育てに少し参加している父親 2), 共働き (母親はパートタイム)  
 ×—子育てに全く参加していない父親 3), 祖父母同居  
 4), 不規則な仕事 (自由業など)

表9 父親の年齢×子育ての参加度

N

		30歳未満	30～34歳	35～39歳	40歳以上
子 育 て	大いに参加	1	4		1
	少し参加	4	4	7	2
	参加せず		3	4	

### 3. 父親と遊び

父親と子どもとの接触の内容ではやはり、遊びが大きなウエイトを占めよう。そこで次に父親と子どもとの平日、休日における遊びの様相を見てみたい。

図2、図3は、平日、休日における父親との遊びの内容である。これらは父親に語られた遊びの内容の複数回答であり、父親により多くの遊びが語られる場合や、あまり遊びの種類が語られない場合など個人差も大きい。

平日の夕方から夜の遊びでは、すもうやふぎけっこ、高い高いなどの体を使った遊び、おもちゃやプラモデル、子どものおしゃべり、本を読む、入浴しながら遊ぶなどの遊びが見られた。平日には「全く遊ばない」と答えたものは30名中4名である。

休日の外での遊びでは、公園や広場での遊びや散歩、サッカーや野球、アスレチック、遊園地や動物園、買い物、図書館、またカヌーやキャンプなどもあげられた。休日には、多くの父親たちは子どもと遊んだり接したりしているようである。休日にも「全く遊ばない」と答えたものは2名であった。

表10は、休日に子どもを遊びに外へ連れ出すことが多いかどうかを5段階評定で尋ねたものであるが、この結果を見ている限り、一部(13.3%)の父親を除いては、休日は子どもとよく遊び接している父親が多いと言えるのではないだろうか。

しかし、たとえ遊びに連れ出しても、父親の子どもとの遊び方には違いがあるように思われる。そこで子どもとの遊び方で、一緒に遊ぶことが多いか、そばで見ていることが多いかを尋ねてみた(表11)。

53.3%の父親たちは子どもと一緒に遊んでいたが、子どもの遊びを「見ている方が多い」と答えた者も8名(26.7%)見られた。この8名の中には、0歳の乳児のいる者が2名おり、あやす程度という理由であったが、その

図2 平日(夜)における父親と子どもとの遊びの内容

(複数回答)

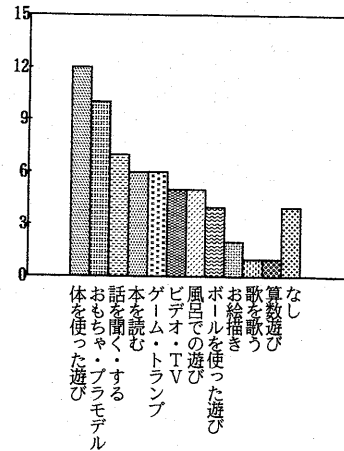


図3 休日における父親と子どもとの遊びの内容

(複数回答)

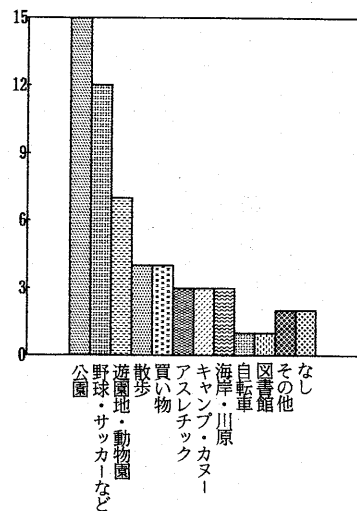


表10 休日に外へ遊びに連れていくか

%

しょつ中ある	時々	ほとんどない
56.7	30.0	13.3

他には、前述した子育てに全く参加していない2名の父親と、あまり参加していない5名の父親が含まれていた。

これらのデータを見るかぎり、一緒に遊ぶ父親かどうかということは、子どもと近い位置にいる父親かどうかをはかる一つのものさしとなるように思われる。プラモデルなどのように家の中での遊びが得意な父親であれ、キャンプやカヌーのようにアウトドアが得意な父親であれ、やはり子どもと一緒に何かをするということが子育て参加にもつながるように思われるのである。

そこで次に、子育ての参加度と遊びとの関連を見てみた。表12を見ると、父親のタイプを4つに分けられるように思われる。

- ①子育てに大いに参加し、また一緒によく遊ぶタイプ
- ②子育てにも少し参加し、時々是一緒に遊ぶタイプ
- ③子育てにはほとんど参加できないが、休日にはよく一緒に遊ぶタイプ
- ④子育てにもほとんど参加せず、一緒に遊ぶこともほとんどないタイプ

この中で③のふだんの子育てに参加できない父親たちは、帰宅時間の調整が可能となれば、もう少し子育てにも参加し、子どもとのふれあいも求めていくタイプであろう。

④のタイプの父親たちは、自営業（会社経営も含む）などで忙しく、ほとんど家庭にいられない者、会社員であっても帰宅時間が遅い者などであったが、あまり子育てに関心がないようにも見受けられた。また、「子育ては母親の仕事」とはっきりと言い切る父親もいた。

この④のタイプに属する父親の事例をあげてみたい。

#### 父親A

帰宅時間が早いにもかかわらず、夜は入浴と一緒にテレビを見る程度、休日もほとんど

外へ連れ出すこともない。インタビュー中も子どもとの具体的な遊びがほとんど出てこなかった。

#### 父親B

通勤時間が長く、帰宅も遅いため子どもの世話はまったくしない、休日に時々ドライブに行く程度。子どもと一緒にいて楽しいことは「ストレス解消になること」と話す。もしもう少し時間的な余裕があったら「会社の連中と遊びに行きたい」と話すほど、自分の関心の多くが家庭の外に向いているようであった。

表11 子どもとの遊び方

たいていそばで見ている	見ている方が多い	半々	一緒に遊ぶほうが多い	たいてい一緒に遊ぶ
16.7	10.0	16.7	30.0	23.3

表12 子育て参加度と遊びとの関連

		子 育 て 参 加		
		大いに参加	少し参加	参加せず
遊 び	よく遊ぶ	① 4	10	③ 3
	時々遊ぶ	2	② 5	3
	遊ばない		1	④ 2

しかしこの他の多くの父親は、子どもと遊ぶことや子どもと接することに心を配っているようであったが、例えば遊ぶ場合、困ることや戸惑いは少なからずあるようである。

表13は、子どもの遊び場所や子どもの友人のことで困っていることを尋ねたものである。

困ることが「多い・時々ある」と答えた26.7%の者の回答では、同年代の子どもが少ない、危険な道が多い、特定の遊ぶ場しかない、家が狭いなど現代の社会状況の特徴を示すものが多く見られた。

子どもとの遊びで戸惑うことの内容としては、表14のように、子どもが0歳代の場合にはコミュニケーションがうまく取れない、何をしたらいいのかわからない、あやし方がわからないといったものが目立つ。また逆に子どもが大きくなると、学校でやっている遊びがわからずついていけない、TVのキャラクターなどの女兒の遊びについていけないなどがあげられていた。

また「子どもが『遊んで』と言って来た時にすぐに応じていいものか、親がしていることが最優先で、いつも子どもの思いどおりにほならないことを教えた方がいいのか戸惑う」といった、迷いの意見も見られている。

そして「自分の父親は子どもと遊んでほれなかったので、自分も子どもとどう遊んでいいかわからない」という切実な声もあった。

保育の現場では、最近の父親は子どもと遊べない者が多いという声を聞くことが多い。しかし、父親が子どもと遊ぶという姿は今まで経験したことのないことなのである。

例えば母親が子育てをする場合に実母の子育てを参考とするのと同様に、父親が子どもとの接し方で参考とするものは、やはり自分の実父との体験であろう。しかし、現在30代、40代の父親たちの実父が子育てをしていた頃は、子どもと遊ぶという風潮もその余裕もなかったはずである。だが、子どもと遊ぶことはなかったとしても、子どもは父親の忙しく働く姿を見ることが多かったであろうし、また家庭の中での父親の役割も現在より、より明確であったと思われる。このように父親の役割が見えなくなっている今、この世代間の

違いを考慮すると、父親たちが家庭でゆとりのある生活を営み、子どもとの遊びにも、接し方にも自信を持てるようになるには、まだまだ世代を越えるような時間がかかるように思われるのである。

しかしインタビューの中で、趣味の豊かな、遊ぶことの得意な父親たちも存在しており、その父親たちは子どもとも、趣味を通して遊んでいた。このような父親たちが今後も増加していくであろうことは十分予想されるところである。

父親論や父親の役割といった議論は、今後ますます盛んになると思われる。昔の父親像にとられることなく、また理想像だけをふりかざすことなく、論議されていかなければならないであろう。

表13 遊び場所や友人のことで困ること

ある	なし
26.7	73.3

- ・同年代の子どもが少ない
- ・一人遊びばかりで友人が作れない
- ・他の子のおもちゃを欲しがる
- ・友人とのけんか
- ・女兒とばかり遊ぶので大人しくなった
- ・危険な道が多い
- ・遊ぶ場所が特定の場所しかない
- ・家でドタバタされるのがイヤ
- ・家が狭い 他

表14 子どもとの遊びで戸惑うこと

ある	なし
33.3	66.7

- ・小さくてさわるのがこわい
- ・小さくて何をしていいかわからない
- ・あやし方がわからない
- ・子どものやりたいことや要求がわからない
- ・子どもが楽しんでないのではないかと思う
- ・女兒の遊びについていけない
- ・何かを買いたいと言った時にお金がない時
- ・学校での遊びがわからない時
- ・子どもの要求にすぐ応じていいかわからない
- ・子どもと遊ぶこと自体に慣れていない

表15は、「子どもと一緒にいて一番楽しいこと」をあげてもらったものである。子どもと一緒にいること、笑顔を見ること、成長を感じられることなどがあげられている。

自分がいとしみ、また自分を慕う者がそばにいること、人の成長を目の当たりにすることの喜びや意義は、父親においてももっと強調されてよいように思われる。子どもが成長するに従い、戸惑いや悩みも多くなることもあろうが、本質的には同じであろう。それにしてもやはりもう少し、時間的な余裕が欲しいところである。

表15 子どもと一緒にいて一番楽しいこと

	(N)
・子どもの笑顔や喜ぶ顔を見る時	(9)
・一緒にいたり遊んだりする時	(7)
・成長を感じる時	(5)
・素直に反応してくれる	(2)
・抱っこやスキンシップ	(2)
・自分を一番好きと言ってくれる時	(1)
・一つの物を一緒に作り上げた時	(1)
・良いことをした時	(1)
・自分のいやな性格が消えている時	(1)
・大人には信じられないしぐさをした時	(1)
・ストレス解消になる	(1)

#### 4. まとめ

現代の子どもにとっての父親を考えるにあたり、父親たちの考えや行動をより詳細にとらえるために、インタビュー調査を行った。調査対象は、首都圏に住む乳幼児を持つ父親30名である。

父親の職業を見ると、職住接近の者はわずかに2名であり、その他は自宅外へ通勤する者であった。通勤時間は、0分から2時間までに幅広くわたっている。帰宅時間も個人差が大きく、夕方4時から深夜12時までとなっていた。夕食後また出かけたり、一昼夜勤務

の者や、勤務時間が不規則な者もいた。

家庭で過ごす時間に対する意識は、必ずしも帰宅時間の遅い父親が、自分が家庭で過ごす時間が少ないとは認識していないようであった。

父親の子育て参加を尋ねると、参加の程度に対する意識と、実際の状況とは必ずしも一致していなかったため、父親の回答と子育ての内容から、父親の子育て参加を判断してみた。

一般的には通勤時間も短く、帰宅時間も早い父親が子育てにも多く参加していたが、不規則な通勤時間の合間をぬって、子どもとかかっている者も見られた。祖父母と同居の父親は帰宅時間が早くとも、子育てにはあまりかかわっていない傾向が見られた。

子どもとの遊びを尋ねた結果では、少数の父親を除いて、よく遊ぼうとしている父親の姿が見られた。

また子どもの遊びを見ているだけの者よりは、一緒に遊ぶの方が、子育てにも参加するような子どもと近い存在の父親のように思われた。

子育てと遊びとの関連では、父親を

- ①子育ても遊びもよくするタイプ
- ②子育ても少し参加し、時々是一緒に遊ぶというタイプ
- ③子育てにはほとんど参加できないが、休日にはよく一緒に遊んでいるタイプ
- ④子育ても遊びもほとんどしないタイプの4つに分けられるようであった。このうち、③のタイプの父親たちは、帰宅時間の調整が可能となれば、もっと子どもとかかわっていく父親であると思われた。

子どもと遊ぶ場合に、困ったことや戸惑いも感じられており、同年代の子どもが少ない、特定の遊び場しかない、危険な道が多いなど現代の社会状況の特徴をよく表していた。

また、乳児との遊び方がわからない、女兒

の遊びについていけない、小学校の遊びがわからない、子どもと遊ぶことに慣れておらず、どう遊んだらいいのかわからないといった戸惑いも多い。

父親たちが自分の子育てを考える場合には、実父の影響が大きいことを考えると、世代の感覚が大きく変化した今、ゆとりのある家庭生活を営み、子どもとの遊びにも接し方にも自信を持てるようになるためには、もう少し時間がかかるように思われる。

また、子どもと一緒にいて一番楽しいことはという問いに対しては、一緒にいること、笑顔を見ること、成長を感じることなどがあげられていた。

父親論や父親の役割に対する議論は、今後ますます盛んになると思われるが、昔の父親像や理想像といったものにとらわれることなく、論議されていかなければならないであろ

う。その場合にも、左記の父親たちの意見にあるように、まずは子どもと一緒にいることや子どもの成長を目のあたりにすることの喜びや意義といったものも、父親においてももっと強調されていいと思われる。

[謝辞] 本調査に快くご協力いただきましたお父様方に、厚く御礼を申し上げます。

<引用文献>

- 1) 田中宏二 「父子関係」新児童心理学講座・家族関係と子ども 1991 金子書房
- 2) 石川洋子 「父親の子育てに対する意識の分析」研究紀要第36集 1992  
文教大学女子短期大学部

[参考文献]

- 1) A. サミュエルズ編 「父親」 1987 紀伊國屋書店